

## 2020年ウェビナー概要

名称: The Unholding political and security crisis in the Sahel and West Africa

日時: 12月1日(火) 18:30~20:45

### 1. 主要議事

司会の佐藤より本日のセミナーのテーマの背景について、笹岡よりアフリカ研究所の設立についてアナウンスがあった後、仏人講演者より次の説明があった。

アラン・アンティル(IFRI): サヘル諸国における内政不安定と(特に2020年8月にクーデターが発生したマリと、ニジェール、ブルキナファソ)、同地域で活動する過激派掃討のための地域軍及び外国軍による軍事作戦の動向、治安(安全保障)と開発との接続に向けた取り組みと課題、過激派の活動領域の拡大傾向(特にコートジボワール、セネガルへの拡大)、につきプレゼンがあった。

エリック・ブランショ(Promediation): 紛争地域における仲裁団体の活動全般に関する説明の後、IFRIのアンティルによるサヘル地域情勢を踏まえ、同地域における武装集団、イスラム過激派の動向に加え、これらの不穏分子を輩出するコミュニティとの仲裁活動の現状や、暴力的過激主義の温床となるコミュニティ間対立といった、地元に着した活動から見えてくる紛争の現状につき説明があった。

コメンテーターより次の発言があり、またスピーカーに対し質問があった。

JICA 加藤上級審議役 加藤: サヘル地域の不安定要因の解消手段の一つとして、IFRIのアンティルから説明のあった治安と開発との接続は、開発協力に携わる者の間で喫緊の課題となっているが、サヘルG5の取り組みを含め現状は難しい。このような中で、仏や国際社会はどのように支援すべきか。

佐久間: 仏がテロリスト掃討のため軍事介入を開始して数年たつが、現地における反仏感情の高まりもあると承知している。そのような中、軍事介入の妥当性、効果についてどのような議論がなされているか

上江洲: 過激派との仲裁に関連し、昨今活発化している誘拐・身代金ビジネスに言及した上で、直近の事例で数千万ユーロという巨額の身代金がどのようにグループ内で分配されたか。

これに対し、後援者より回答があり、フロアーからも発言があった。

### 2. 参加人数・参加者の内訳

参加人数 54名(冒頭の時点)

申込人数 56名(所属先: JICA、外務省、防衛省、研究者、開発コンサルタント、在京外交団、NGO、外国特派員協会。大半は日本人、外国人数名を含む)

Meiji-IASメンバー(運営側除く)5名

運営側(スピーカー、運営側、通訳含む)10名

### 3. 気づきの点・要望

登壇者が日本-フランス-ブルキナファソの3か所に分かれていたが、ブルキナファソのネット接続が一時不安定となり、また質疑応答の一部で逐次通訳を入れたことで質疑応答の時間が予定よりも短くなったが、当初予定していた2時間から15分ほど延長して終了した。

ウェビナー運営にあたり、広報・参加者登録や、当日のZoom操作を手探りで行ったが、今後もウェビナー開催が想定される場所、本年のようなものは通常の教員がマネジメントできる範囲を超えるように思うので、運営(技術的なサポート)に携わるスタッフの配置や謝金の提供も予算可能項目として含めて頂けると幸甚であり、同種の企画をやりやすい。